

生涯学習だより



ひとごころ

人心～「人きたえあう【ふゆ】…北国に生きる力」

～かみしほろの健やかな育ち～

年間テーマ 「わが町の教育」



森田 委員



杉森 委員

（伊藤（教育委員会））・今回の座談会のテーマは、「家庭学習・宿題について」です。それでは、杉森委員からお願ひします。

一つは『学力をつけるため』、もう一つは『自習習慣をつけるため』でしようか。まず『学力をつけるため』から考えます。宿題にこの目的があるならば、「学校だけで学力はつかないのか？」ということになってしまいます。親としては、「学校だけで学力をつけて帰つて来て欲しい」というところがあるんです。

次の『自習習慣をつけるため』を考えます。宿題がその日習った内容だったらしいんですけど、授業内容を発展させたものを出されると、子どもは自分で解けないことが多いです。親を頼つて一時間近くああだこうだとやるのは、親も子どもすごく負担になります。自習習慣を身に付けるための宿題であれば、一日十分・十五分ぐらいで、子どもが自分だけができる内容がいいです。これが親としての願いです。

（森田委員）夫婦で「大地の学校」を北門で開き、今年で二十二年目です。二十二年間家庭教育に携わっている者として感じた事を述べます。

子どもが六人います。長女が二十四歳、次女が二十歳、長男が大学生、二女が高校生、その下に小学生の双子がいます。長女、次女は、今から約十年前、ゆとり教育が始まつた頃です。土曜日が週一回休みになつて、宿題をなくしましようという時代です。自由な体験をさせましようということで総合的な学習が始まり、宿題に縛られる習慣をなくすことを美德とする雰囲気でした。このような施策は、文部科学省からおりてきたもので、学校現場は混乱しているようでした。先生方は総合的な学習で何を具体的に指導すればいいのか把握しきれていない感じでした。矛盾を凄く感じました。そのようなゆとり世代の長女、次女が小学生の頃、「地球は丸いつて知つていてる？」と聞きたくなるほど基礎知識が不足していました。円周率も3で習つていました。

現在、「高校生・大学生の学力が下がつてきたといわれています。それなら小学校で総合的な学習の時間を減らして算数・国語などの力をつけていきましょう」となつてきました。同時に宿題が増え始めました。兄弟の中では、小学生の双子の宿題が一番多いです。長女、次女の時は、宿題はありませんでした。現在高校生である二女は、朝読書がもてはやされている時代でした。読書、読書と。小学生の双子は読書+家庭学習をしつかりしましようという流れです。

子どもの体力が劣つたから体育の時間を増やしましようとか、体力をつけるために何かしましようとか、文部科学省の方針は、すごく単純な理由で方向転換するというイメージで

す。知識を詰め込みすぎたらゆとり教育、知識がつかなくなってきたといわれたらまた元に戻すという感じです。そういうことで学校のカリキュラムが決められていくんだなあと親の目で見てて思いました。

うちは家で全く子どもたちの勉強を見てこなかつたです。勉強は学校にお任せで、家庭では家でのことを教えたいと思っています。例えば、家の役割を知りながらみんなが快適に過ごせるように掃除を手伝つたり、食器洗いを手伝つたり、家中で生活していく術を私は家庭で教えてきましたし、今後も教えていきたいと思っています。学校で勉強することは学校にお任せという気持ちで、一番上の子から一番下の子まで育ててきました。その方針は今でも変わりません。「宿題やりなさいよ」とは言いますけど、「宿題の内容を教えて!」と子どもが言つても、「自分で考えなさい」「学校で先生に聞きなさい」と言つっていました。私が先生の代わりになつて教えるということは今までやつてきていません。それは家庭の役割ではないからです。家庭の役割は、子どもたちが家で生活できる術を身に付けるように教えることです。一緒に料理したりしながら、家庭の温かさと雰囲気を伝えてきました。長女と次女の娘とはピザやパンなど一緒に料理をたくさんしました。その回数は、最近どんどん減つてきました。この間、次女に「私の幸せだった記憶は、家でお母さんたちと一緒に料理とかをたくさんしたという記憶がすごく残つてること。その幸せ感がすごく残つていて。だから双子にもめんどくさがらずにもつと料理とかと一緒にやつてあげて!」と言われました。私もだんだん根気がなくなつてきて、一緒に料理する回数は少なくなつてきました。しかし、私が子どもたちに伝えたかったなあと思つてることは、上の子たちには伝わつていて、良かつたなあとほつとしました。

勉強は学校にお任せです。母親が関わることではないです。夏休みの宿題も上士幌小学校になつて全部親が丸付けをしなくてはいけなくなりました。他の保護

者の方が「すぐ丸付けが大変」と言つていました。一番下の双子は、一回も丸付けをやつてと言つてこなかつたので、聞いてみたら「忙しい親はいいんだって。自分でやるから大丈夫」と言つていました。一回も丸付けをせず、どんな宿題だつたかも知らないうちに終わつてしましました(笑)。

ゆとり世代の長女・次女は宿題もなく、ゆつたりとした学校生活を送つてきました。長女も次女も興味ある事だつたら親が何も言わなくとも必死でやつて習得していきました。高校卒業した後、本当に必要だと思った時に自分がやりたいことを一生懸命やつしていました。家庭は子どもが将来そういう気持ちになれる精神が持てるように育ててあげることが役割だと思います。

〈石川委員〉 まず私は全く宿題を出しません。



石川 委員

出さない理由ははつきりしていて宿題で学力をつける自信がないからです。宿題をやつてくる子は宿題を出さなくとも家庭学習を自分でやる子です。一番学習に取り組んで欲しい子ほど宿題をしてきません。だから、基本的には宿題で学力をつけるのは難しいのです。学習者を直接教えてあげられる状況以上に基本的な力を伸ばす方法はありません。五教科だけではなく、絵でもスポーツでも隣に人がいて教えることが基本です。もちろん見守りという方法はあります。だから、学校で身に付かない習熟的な学力を宿題で補完するというのは二十年近く教師をしてきた立場から言うと難しいです。学力格差が広がるだけです。ではなぜ学校は宿題を出すかというと、先ほど言われた「自学力をつけさせたい」というのがあります。

もう一つは、親御さんから「宿題を出してください」と言われる声があります。

基本的には家庭でする学習習慣は家庭でつけてもらえばいい。そもそも学校でやらなければならぬことはどんどん増えています。家庭がやらなければならぬ

領域まで学校側が手を突っ込んで、それも全部学校側が肩代わりしますよという方法は間違っています。学校は学校ができることを一生懸命やることが大事です。コミュニケーションスクールが始まつた一つの意味合いとして、学校の先生がやらなければならぬ領域が増えすぎて、教師一人ひとりの力量だけでは、それらをこなすことができなくなっているということがあります。食育、性教育、ＩＣＴ、農業教育、林間教育、金融教育その他もろもろ、そのようなことを学校だけで全部総括的にやれたりするわけがありません。学校だけではできないから町民の皆さんとよくよく話し合つて手伝つてもらひながら子どもたちを育てていきましょうというのが、コミュニケーションスクールの発想です。

現在、家庭だけでは家庭学習の習慣を十分付けられないという現状もあります。

子どものしつけなど、家庭だけでは難しくなっています。我々教師の仕事が他の人たちの助けなしにはやりきれないのと同様に、家庭の中で今まで身に付けられていたものも現状では家庭だけでは身に付けられないです。だから、学校と家庭とが双方にお互いがお互いのことを思いやりながら協働でうちの町の子どもたちを育てていきましょうというのが、コミュニケーションスクールです。

そういう枠組みの中で宿題が位置付けられるのならば、位置付けたらいいと思います。「先生、家で全然勉強しないから宿題ぐらい出してください」というのではなく、「宿題を出すんだつたらご家族の方でもそれなりに関わつてくださいね」とお互いが協働して子どもたちを育んでいけばいいです。

上士幌中学校は、今年度から大きな取組を始めました。学校の玄関に大きなホワイトボードを用意し、それぞれの教科から出される宿題を書いています。出された宿題が見てすぐ分かるように、可視化されています。たくさんの議論を経て、この取組を始めました。中学校は九教科の先生がおり、各自自己責任で宿題を出していくきます。どのくらいの宿題が出されているのか誰も分かつていらない状態で

す。それをホワイトボードで可視化していくと、生徒も先生も「この教科も宿題が出ていてるから、出すのはこれぐらいにしておこうかな」「今日はどの教科も出でないから私の教科を出してもいいな」等そういう調整ができます。生徒も全体像が見えることで宿題の総量が分かります。特に勉強が苦手な子どもほど総量、全体像をつかむのが苦手です。だから、可視化されることでどのくらいの量がいるかを把握することは大切です。そのためにホワイトボードの取組をやっています。学校の立場から言つても、宿題というのは統制的に、学校と家庭が困らないように出す必要があります。宿題を出す目的がちゃんとあり、苦行だけではなく、宿題をやることによって何かいいことがある実感が親と子ども双方にあり、納得できる形で出さないといけないものです。



田中委員

〈田中委員〉 私のうちのことを思い出してみると、一人の男の子がいまして、人とも少年団活動をやっていました。家庭学習の時間がなかなか取れなかつたです。どうしたらいいかということでお、妻が友達に相談したら、公文（公文式）くもん）がいいよとのことでした。学力をつけるには繰り返しが大事だと、国語と算数の一教科を毎日十分、十五分くらいずつ取り組んでいました。算数は足し算から始めて、本当に基礎から繰り返し繰り返しやつていました。もちろん宿題も出ていました。子どもが自分で分からぬ問題があつた時、妻が子どもの横について教えていました。私は音を小さくしてテレビを見ていたことを思い出しました。

居間で子どもは勉強していました。子ども部屋がありますが、妻が子どもに教えるために居間でやつっていましたね。宿題など家庭学習を子どもは涙を流しながらやつっていました。宿題はほぼ毎日、公文を早く終わらせてからやるという習慣でした。少年団とのからみがあるのでやりくりして家庭学習時間を作りださないと

いけなかつたからです。七時くらいまで少年団があつて、晩御飯を食べて、公文・宿題をやり、お風呂に入るという習慣でした。

小学校までは母親が、中学校からは父親が関わると良いと聞いていたので、うちはそのようにしました。子どもが中学校の時、私がPTA活動に行きました。参加しているのはほとんどお母さん方です。上士幌中学校では男は私一人で恥ずかしかつたです。その場から逃げ出しました。昼は給食が出ました。女性の方はゆっくり話しながら食べていましたが、私は早く食べました。子どもは、帯広の高校に行きました。そこのPTA活動には父親が半分近くいました。

〈杉森委員〉 私自身は、小学校の時に家で勉強した記憶がほとんどありません。中学校の時は、テスト前にやっていた記憶があります（笑）。小学校四年生の時、自分から言い出して公文教室に一時期通い始めました。でも一ヶ月位で全くやらなくなりました。理由はいろいろありますが、親が管理していないと、子どもの力だけでは、公文はなかなかできません。基本的には習慣にさせるまでがポイントです。自分がやる気になるまでは、声をかける人が隣にいないと習慣になりました。では、公文をやつていれば学力がつくかというと、学力の定義によつて言で言い表すことは難しいです。学力とはどういう力か、という話をし出すと一時間では絶対に終わらせません。そもそも全国的に北海道は学力が低い、一貫して最下位を争っている状態であります。ただ、これは小・中学校で調べている学力テストの結果です。大人になつてからの、社会に出てからの生きる力が小中学校の段階で判断できるかといえばできません。

また、経済力のある家庭ほど子どもの学力が高くなる、と聞いたことがあります。そうであれば国として義務教育をやつている以上、親の経済力で子どもの学力に差が出てはいけません。塾に通つて練習問題をしている子どもたちにどんどん学力がつき、塾に通つていない子どもと学力差が開いていくようでは駄目だと

思います。

学校の先生方は教科書の進め方に配慮しながら、子どもたちに考えさせていく授業を、工夫してよくやつていると想います。考えさせた上で、今度はそれが身に付くように、個人に合わせた練習問題を繰り返す時間があつたらいいなと思うんです。一年生の、それも早い時期から。

〈森田委員〉 杉森委員に共感します。子育ての考え方、感性、方向性がよく似ています。塾に行ける子と行けない子で学力格差が出て、進学に差が出るのは良くないです。親の経済力の差が子どもの学力差に繋がっていくのは、やっぱり良くないと思います。そうならないような制度を国が考えていくべきです。うちは長女が大学に行きたがつていたんですけど、六人兄弟の一番上だったので、あきらめるように言いました。その代わり彼女は、自分で貯めたお金でカナダに行つて国際英語指導者免許を取つてきました。我が子ながら行動力があるなあと、客観的に見て思いました。長男は大学にこだわっていました。自分で奨学金と授業料が安い国公立大学を調べていました。親からの援助はゼロだと本人には伝えていました。高校の時の成績と親の収入と兄弟の数を申請した結果、大学一年生・二年生と授業料が全額免除になりました。半年に一回申請があつて、書類を用意して送らないといけません。制度のことを長女の時には知りませんでした。制度があることが分かるようにもつと発信して、高校生やその親に伝えて欲しいです。制度があることを知らなかつたので、長女には大学をあきらめるように言つてきました。制度があることを知つていれば、大学への道を選んだかもしれません。長男は執念で「僕は絶対に大学に行きたい」と言つていましたし、上の姉ちゃんたちも「あなたは大学に行きなさい」と長男に語つしていました。長男は大学へは相当アルバイトしなければならないと覚悟を決めていました。事実、親は一銭も出していません。長男は大学を一年休学して英語力をつけるためにカナダに

行つて、向こうで働きながら留学しようと考えています。就職したらそのような経験もできないから、休学してカナダに行こうと考えているという長文メールが長男からきました。驚いて「お母さんそんなこと知らなかつたよ！」と返事しました。でも長男は「今しかできることを優先してやろうとしているんだな」「大学の時にやりたいことを探し出し、仕事に付いたらそれを一生懸命やると覚悟した上で休学して留学しようとしているんだな」と私は長男を認めました。自分の力でやるなら好きにやつたらいいと思つています。

「どうしてうちはこんなに貧乏なの？」と子どもたちによく言われました（笑）。外国に留学してまた復学できるという制度などが実はあるんだというのがもつと世間に知れ渡つたら選択肢が広がります。親も子どもの大学生活、留学などにどのくらい費用がかかるか詳しく分かつていないので、そのような制度のことが世間に知れ渡るようになればいいです。うちは長男がやつてくれたから知ることができました。息子が大学に行つてみて分かりました。長女は、自分の力で何とかして、自分の力でやつていける子になつたので結果オーライ、だつたんですが、もし長女の時に制度を知つていれば、その道を選んだかもしれません。それがいいか悪いかは別として、様々な道があることを国は発信して、子どもたちが選択していく形が一番望ましいと思つています。そうなると、経済面で進学をあきらめる子どもたちが減つてくると思います。

〈石川委員〉 公文は基本的に習熟度別、しかも個別的に、人ひとりの子の到達度に合わせた形でやつています。学校というところはそうはなつていません。日本の学校は同じ年齢で学習することを明治以降基本としています。これは実は世界基準で考えると非常に特殊です。世界の国々では、異年齢で学習するのが、学校においても基本です。しかも子どもの習熟度別の状況によって学習の進度は一人ひとりバラバラになっています。日本はその年齢に応じたレディネスにおいて

て決まつた教科書で学習させなければなりません。内容と進むスピードが決まつているからゆつくり学ぶ子はもれていきます。早い子はどんどん伸びていきますが。

実際、小中学校の時にそんなに成績が良くなかった子が、高校・大学で伸びていくのをたくさん見てきました。少なくとも全ての子どもに一律同じ内容・同じ量の宿題を出すという学校のシステムは上手くいっていません。

〈森田委員〉 全国には宿題をやつてきた子どもに対して、またはたくさんやつ

てきている子どもに対してシールを貼つていく先生方がいらつしやるとテレビでやつっていました。見た目で宿題をやつてきてている子とやつてきていない子が分かるようになっています。これは、やつてこない子に劣等感を、やつてきてている子には優越感を与えていくだけだと思います。クラスの子ども同士で順位づけがなされる雰囲気が醸し出されてくると思います。宿題が「宿題をやらせる」という目的に代わつています。

〈石川委員〉 学習習慣を身に付けることが宿題の目標・目的であるはずなのに賞罰になつています。賞罰では人は動かないです。

〈杉森委員〉 学校の宿題に取り組めば取り組むほど学力が上がっていくという成果が出ているなら宿題を出す意味があると思いますが、その辺りはどうなんでしょうか。

〈石川委員〉 エビデンス（科学的根拠）は方法にもありますが、ほんないでしょ。そもそも宿題で学力が上がつてているかどうかということを判断することはかなり難しいはずです。

〈杉森委員〉 そうすると現在の学力テストは、どのように判断すればいいのでしょうか。

けさせるシステムになっています。そのために、どうしても学校同士の比較、県同士の比較などに目が向いてしまいます。A君の学力はどうなの、B君の学力はどうなのという話はまともに議論されにくい状態になっています。

〈杉森委員〉 学力テストは、数値で表すことのできる範囲の力ですよね。数値で表すことのできない力、いわば生活に欠かせない力の方が大切だと思います。今どの程度の能力がついているのかを判断するテストはある程度あつた方がいいと思いますが、他人と比較するためのテストならば必要ないとさえ思います。

〈石川委員〉 北海道は運動能力テストの結果・数値が低いのがむしろ問題です。運動体力の基礎テストは種目が決まっています。例えば踏み台昇降運動なら回数で達成できたかどうかが分かります。数値としてはつきり出でてきますから、学力テストよりもよりシビアに現状把握できます。運動は、北海道は一貫して最下位です。

〈森田委員〉 それ凄く分かります（笑）。私、都会育ちです。都会の人は凄く歩きます。

〈石川委員〉 すぐ歩きますし、冬の時期も外で遊べるということが北海道と決定的に違います。この間も和歌山県の学校に見学に行つてきたんですけど、子どもたちは普通に校庭で遊んでいました。北海道の子どもたちは、スケート少年団に入るなどしない限りは、運動不足になつていく。

〈森田委員〉 それと北海道に来て思つたことは、子どもの学校への送迎が当たり前になつているということです。うちは一貫して「たとえ親が行けたとしても、車の送迎はしないよ」と子どもたちに言つっていました（笑）。親が送迎してしまふと子どもにとつて大事な通学という体験を奪つてしまつことになります。道草しながら帰るとか、雨の日に水たまりでびちゃびちゃしながら帰るとかが、子どもにとつて貴重な体験になります。私は子どもの頃、そういうことがとても楽し

く、いい思い出として残っています。でも、いつも歩いて登校しているうちの子どもたちを、時には車に乗せて送つて下さつた地域の方々には、子どもたちに人の温かさを感じさせて頂きとても感謝しています。

〈杉森委員〉 体力をつけるためにも歩いた方がいいです。

〈石川委員〉 上士幌中学校も夏場は自転車通学ですけど、冬になると一気に送り迎えが増えます。十分、十五分なので冬場も歩いた方が体力がついてきます。僕も車で通つてているけど（笑）。

〈森田委員〉 体育ではなく普段の生活の中で、子どもが体力をつけるにはどうしたらいいかと考えて工夫していくことが大事だと思います。子どもには普段の生活の中で体力をつけていくて欲しいです。

〈石川委員〉 家庭学習も運動にしますか（笑）。子どもの体力不足は、いくつか北海道特有の悪条件はあると思います。しかし、学習は体力の問題とは無関係ではありません。

〈森田委員〉 体力がないと姿勢が悪くなったり、勉強の集中力も続きませんし、忍耐力もつきません。

〈石川委員〉 その辺りを科学的に証明し、説明するのは難しいですが、間違いないく学力と体力は関係があると思います。しかし、条件的に北海道はむしろよくやつていていますよ。